

[05] 湿原環境の破壊と保全—釧路・サロベツ湿原のノンポイント汚染—

橘 治国[○] (NPO 法人 水圏環境科学研究所)
遠藤 勝邦 (NPO 法人 水圏環境科学研究所)

湿原は、人為汚染のない自然の地質、水理・気候条件のもとで形成された。特に、粘土鉱物が混入がなく水位が高い地域は、ミズゴケが優占する高層湿原へと発達した。しかし近年の土地開発や農業などの産業開発が、この湿原環境に影響を及ぼした。貧栄養あるいは地域特有の湿原環境は、その生態系に大きな影響が及ぼされ始めた。第二次大戦後の北海道の湿原は、この影響が大きい。一次産業や土地開発の影響であるために行政の対応が遅くなり、早急な改善対策や保護が望まれている。

演者は、サロベツ、釧路そして石狩等の湿原を対象に、生態への影響を栄養塩の分布を、さらに水の供給源を探るための無機成分の動態を、水質学から調査してきた。これらの湿原では、ササやハンノキの分布域の拡大が顕著で大きな環境問題になっている。湿原内の湖沼ではプランクトン異常増殖や魚種の変遷が認められるようにもなった。今回、湿原生態系変貌(いいかえれば破壊)の現状、原因について、水質学から報告したい。また現状の変貌防止対策についても、検討した。

問題となっているササ域拡大は、土地開発に伴って湿地に混入する粘土鉱物からのケイ酸塩の溶出が原因であり、ササが生育できなくなる現行の水没事業は浸水方法によってはかえってササの異常増殖を引き起こすこと、ハンノキは農地や畜産などのからのリン酸の流入ばかりでなく、流域がからんだ湿原外起源の廃棄物の廃棄や流入によることを中心に報告したい。

人間生活に伴う水環境の変化は湿原生態と密接に関連している。我々の日常生活においても、自然環境を意識しなければならない時代である。湿原は我々が生きられる環境を考察するうえで貴重な場であり、自然の湿原を後世に残すことは我々の責務である。